★研究所だより☆

▼韓国にも高齢者協同組合をつくりたい。韓国で教鞭をとっておられる丸山さん（生活クラブ生協）のご紹介で、東亜日報やハンギョレ新聞で活躍されたジャーナリストの李仁哲（イ・インチョル）さんご夫妻が研究所に来られた。96年に研究所の菅野さんと高瀬毅さんが訪韓された時に、日本の高齢者運動を知り、それ以来高齢協に関心を寄せていたとのこと。「韓国の高齢者問題も深刻で、是非日本の先進的、民主的な取組を参考にさせて欲しい」と、研究所にある資料を持ち帰られた。「日韓の高齢者運動の連帯は勿論だが、アジアレベルで高齢者問題を議論する協議会をつくりたい」と大きな夢をもっておられた。▼「『協同労働の協同組合』法制定のための市民会議」「いま『協同』を拓く2000全国集会」と、二つの集会準備を同時並行で進めるという初の経験で、いつもは静かな研究所が騒然とした雰囲気の中にあった。25日午前に予定している「『協同労働の協同組合』法制化をめざす市民会議」の設立へ向けて、東京商工会議所「福祉・生活環境づくり21」の川村耕太郎専務理事、全国大学生協連の田中学会長理事、全日本民医連の高柳新会長など、続々と労協法の呼びかけ人が増えている。▼協同集会の参加要請活動で、労協・高齢協が開いている「ヘルパー講座」「ケアマネージャー受験講座」で話をさせて頂いた。特に三多摩で行われた「ケアマネージャー受験講座」には、100人近い受講生があつまっており、福祉を専門として頑張ろうという方々の熱意が伝わってくるようだ。私の話は、「高齢者などの自立支援のプログラムは公的介護保険のメニューに限らず、地域の多様な福祉資源の利用も欠かせない。そのヒントがこの集会に詰まっている」というものだった。休憩直後ということもあり、最初はざわざわしていたが最後はしーんとした雰囲気の中で聞いていただけた。早速申込があったと言うことを事務局の人から聞き、訴えた甲斐があった。江戸川区から委託された講座にヒントを得て三多摩で開いたものだが、行政の支援もない中で、労協の組合員が取り組んだものだ。彼らの行動力と「自分の住む町にも労協の地域福祉事業所をつくりたい」という素直な気持ちがこの講座を生んでいる。集会直前でどれだけの人が集まってきてくれるのか分からない中だが、良いと思ったことを独自に取り組む労協組合員との出会いが貴重だった。▼中川理事長が研究所の10周年を記念して翻訳した「協同組合企業とコミュニティ」が日本経済評論社から出版された。原題は「モンドラゴンからアメリカへ」というものだったと記憶している。地域の中で複合化しながら成長を続け、多国籍企業とのせめぎあいの中で、現実との折り合いをつけるモンドラゴン協同組合の今を伝える労作である。著者であるグレッグ・マクラウドさんが来日されている。地域社会に責任を負う企業のあり方と地域の雇用を生み出す協同組合企業をつくることが、カナダのノバスコシア州に住む氏の大きな関心のようだ。本誌には、マクラウドさんの「企業論」を掲載した。企業の本質に迫るもの。カナダでは日本料理もよく食べるということで、はしの使い方もとてもお上手だ。日本酒にも積極的にトライされている。短い滞在で、京都など日本の観光地にご案内できないが、楽しく過ごして頂きたいと思う。（坂林哲雄）